



# かもめ



37

ひとりのおんなが、ふなつきばでふねをまっていました。

おんなはかつてふなつきばのやどでこまづかいをしていましたが、いまはしずかにくらしています。

なぜならおんなのおなかにはあかんぼうがいたからです。

おんなは、まいにち、うみのむこうからやってくるふねを、しずかにまっていました。

おんながまっているふねは、あかんぼうのちちおやをのせたふねでした。  
ちちおやになるはずのおとこは、いつかのとしのはるにこのまちにやってきたのです。

しかしふゆがくると、  
「きみのことはすきだけれど、  
ぼくはすこしのあいだまたこうかいにでなければならぬ。  
きっとまっけておくれ。」  
そういつてふねにのつていつてしまいました。

だから、おんなはまいにちこのふなつきばでおとこがもどるのをまっけているのです。

しかし、ふゆのあいだじゅうさむいうみかぜにあたつていたために、  
おんなはおもいびようきにかかつてしまいました。

はまひるがおがさくあさに、おとこのこをうむと  
いっつうのてがみをのこして、おんなはしずかにうごかなくなりました。

てがみには、

あなたをかもめとなづけます。  
とうさんはかならずもどります。とうさんをまつように。

そうかかれていました。

なんどもなんどもふゆがきて、かもめはおおきくなりました。

そして、ははおやののこしたてがみのおりまいにちふなつきばでまちました。

ときにはあめがふり、うみがあることもありました。

「ぼくはかあさんのために、とうさんをまつ。」

それがかもめのやらなくてはいけない、ただひとつのことでした。

じっかいめのふゆがおわるころ、  
うみのむこうからいっせきのふねがやってきました。

ばいふをくわえたおおきなおとこがふねからおりてきて、かもめをみおろし、

「かなというおんなをしっているか。」といいました。

「かな」はかもめのかあさんのなです。

「ぼくがうまれたときから、かあさんはいません。  
だからぼくは、かあさんのかわりにとうさんをまっているのです。  
あなたはぼくのとうさんでしょう。」

かもめはふるえるこえでいいました。

まっすぐにたちのぼっていたばいふのけむりがゆれました。

「ながくまたせたね。」

おとこはしずかなこえでいいました。  
おおきなてがかもめのあたまをつつみました。

かもめはうれしくて、まっついてよかったとおもったのです。

とうさんがもどってきて、  
かもめはとうさんといっしょにくらしました。

かもめにはとうさんがいたことがなかったので、  
いっしょにくらせるだけですてきでした。

だけれどよるがくるたびに、とうさんはないようでした。  
そしてぱいぷをふかしながら、ぶどうしゅをたくさんのみました。

そしておおきなこえをだしてかあさんのなをよびました。  
よびつかれると、そのままねむってしまうのでした。

「ぼくはとうさんをまっていたけれど、  
とうさんがまっていたのはかあさんだったから、  
だからきつととてもかなしいんだな。」

そうおもうとむねがくるしくて、きえてしまいそうでした。

なつがきてあきになっても、  
とうさんのかなしみはつきませんでした。

とうさんはまいにちぶどうしゅをたくさんのみ、  
むらさきいろのばいぷのけむりにもくもくとつつまれつづけました。

そしてかもめのなまえをよぶこともなく、  
ぼんやりといちにちまどのそとをみているのでした。

「かあさん、ぼくはとうさんになにをしてあげればいいのかろう。」

かもめはねむれないよるに、うみをみながらかあさんにかたりかけました。



かもめはあるばん、  
ふるいほんのあいだからいちまいのしゃしんを見つけました。

それはわかいとうさんとかあさんのしゃしんでした。  
まあたらしいすいへいぼうをかぶったとうさんと、  
れーすのついたふくをきたかあさんの、このよにいちまいだけのしゃしんでした。

かもめはうまれてはじめて、かあさんのかおをみたのです。  
そのかおは、まいにちみているじぶんのかおにととてもよくにっていたのです。

そして、おもいつきました。

「ぼくがとうさんのためにかあさんになれば、きっととうさんはもうかなしまずにすむにちがない。」

かもめはたんすをあけ、かあさんのようふくをさがしました。  
うすあおいもめんのわんぴーすをひっぱりだして、それをきました。

ぼさぼさとのびたかみをとかして、ととのえました。

ほこりだらけのほうせきばこからくびかざりをだして、かけました。

かわいたくちべにをくちびるにこすりつけました。

それはわかいひのかあさんのすがたそのものでした。

かもめのむねはふるえました。

「これはとてもただしくて、とてもまちがっているけれど、とてもうつくしい。」

とうさんのへやへいくと、とうさんはべつとからつきをみていました。

へやはひどくよごれていて、ひどいにおいがしました。

たくさんのぶどうしゅのびんと、とうさんのしろいかおがつきのひかりにてらされていました。

かもめはとうさんをよびました。

「とうさん」

とうさんはゆっくりとかもめをみました。

とうさんはとてもとしをとったようにみえました。

かもめはとうさんのそばへいき、まっすぐにとうさんをみました。

「あなた、わたしよ」

すると、とうさんのくもったひとみからしずかになみだがこぼれたのです。

とうさんはかもめをつよくだきしめ、むねにかおをおしつけて、なきました。

そしてかすれるこえで、かあさんのなまえをよびました。

このときかもめは、うまれてはじめてひつようとされているとおもったのです。

それはいままでかんじたことのない、とてもおおきなかんじようでした。

かもめはとうさんのそばへいき、まっすぐにとうさんをみました。

とうさんはとてもとしをとったようにみえました。

そしてじぶんのまえにいるのがかもめだということがわからないようでした。

とうさんはかもめをつよくだきしめ、むねにかおをおしつけて、なきました。

このときかもめは、うまれてはじめてひつようとされているとおもったのです。

かもめは、じぶんがかもめであるということをやめました。  
それはとうさんのためであり、かもめじしんのためでした。

